

KODOMI SITE

小堂見遺跡

—ふるさと農道整備事業玉川地区
埋蔵文化財発掘調査報告書—

1996年3月

茅野市教育委員会

KODOMI SITE

小堂見遺跡

—ふるさと農道整備事業玉川地区
埋蔵文化財発掘調査報告書—

1996年3月

茅野市教育委員会



遺跡遠景 1



遺跡遠景 2

はじめに

茅野市には300以上もの遺跡が発見されていますが、その多くが縄文時代の中でも中期と呼ばれる時期のものです。それらの遺跡の多くは八ヶ岳山麓の中でも標高1,000m前後に位置しており、その代表的な遺跡が国の特別史跡に指定されている豊平地区の尖石遺跡です。

茅野市は市街地から放射状に延びる道路は整備されているものの、南北をつなぐ道路の整備が遅れているとされています。その南北を結ぶ道路の一つとして、市民に期待されている道路の一つが、グリーンラインと愛称される道路です。このたび、ふるさと農道整備事業玉川地区として小堂見遺跡の発掘調査が行われました。

この玉川地区の小堂見遺跡の周辺には、縄文時代の大集落と考えられている藤塚遺跡や、旧石器時代や縄文時代の早期の遺物が出土している上御前遺跡など、多くの遺跡のあるところです。

発掘調査では、今まで小堂見遺跡で確認されていた縄文時代中期後半や平安時代の生活の跡ではなく、縄文時代中期初頭の住居址や、同じ時期と思われる貯蔵穴やお墓と考えられる穴、やはり縄文時代の陥し穴などが発見されました。これらにより、小堂見地籍を中心とする広い範囲の中を、各時代・時期によって場所を変えて使い分けていたことも分かってきました。小堂見遺跡はまだ調査された面積も狭く、全体像を把握するにはまだまだ時間がかかると思われます。今後も、様々な機会を通じて遺跡の全容を解明していく努力を続けてまいりますので、関係各位のご協力をお願いするところであります。

最後に、事業の実施にあたってご協力いただいた、長野県教育委員会をはじめ、諏訪地方事務所、地元の皆様、調査に参加された関係者の皆様に対し、深甚なる感謝を申上げます。

平成8年3月

茅野市教育委員会
教育長 両角 徹郎

例言・凡例

1. 本書は、ふるさと農道整備事業玉川地区埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、長野県諏訪地方事務所の委託を受け、茅野市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、平成7年5月15日から8月31日まで行なった。
整理作業は、平成8年1月4日から平成8年3月20日まで行なった。
4. 出土品の整理及び報告書の作成は、文化財調査室で実施した。
本報告書に係る出土品・諸記録は、文化財調査室に保管している。
5. 本報告書の執筆は、小林深志が行なった。
6. 調査の体制

本調査は茅野市教育委員会茅野市文化財調査室が実施した。組織は以下の通りである。

調査主体者　　両角昭二・両角徹郎（教育長）

事務局　　宮下安雄（教育次長）

文化財調査室　両角英行（室長）　鶴飼幸雄（係長）　守矢昌文　小林深志（兼）　大谷勝己

小池尚史　功刀 司　百瀬一郎　小林健治　柳川英司　大月三千代

調査担当　　小林深志（尖石考古館学芸員）

調査補助員　占部美恵　伊藤千代美

発掘調査・整理作業協力者

長川 真　　花岡黙友　　原ちよ子

目　　次

卷頭図版

序文

例言・凡例

目次

第Ⅰ章　調査に至るまでの経過	1
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境	1
第Ⅲ章　調査の方法と経過	4
第Ⅳ章　遺構と遺物	9
第Ⅴ章　まとめ	18

図版

報告書抄録

第Ⅰ章 調査に至るまでの経過

平成4年4月に文化財調査室が市内の関係各課に今後の開発計画について実態調査を行なったところ、建設関連対策室より、ふるさと農道緊急整備事業（北大塙・丸山線）があるとの回答を得られ、6月10日保護協議を実施した。その中で、県を事業者とする地区内には小堂見遺跡と久保川遺跡が、市を事業者とする地区内には梅原林遺跡、日向削遺跡、梨ノ木遺跡が含まれる可能性のあることが明らかとなった。

平成5年9月30日、現地にて県教育委員会文化課、諏訪地方事務所、市建設開発対策室と市教育委員会文化財調査室の4者で保護協議を行ない、11月18日付け5教文第7-12-23、県単農道整備事業（ふるさと農道）農平・玉川地区にかかる小堂見遺跡の保護について（通知）が県教育委員会より提出された。それによると、小堂見遺跡の保護については、

- ①事業に先立ち発掘調査を実施し記録保存を図る。
- ②発掘調査にかかる経費は、事業主体者が負担する。
- ③発掘調査は、茅野市教育委員会に委託する。

というものであった。発掘調査計画書では、1,800m²以上を発掘調査することとし、その費用14,778,000円が示された。

市教育委員会ではこの計画書に基づき、平成6年度の一般会計に事業費を盛り込み、調査に備えたが、県による用地取得がはかどらず、翌年度新たに事業を行なうこととなった。

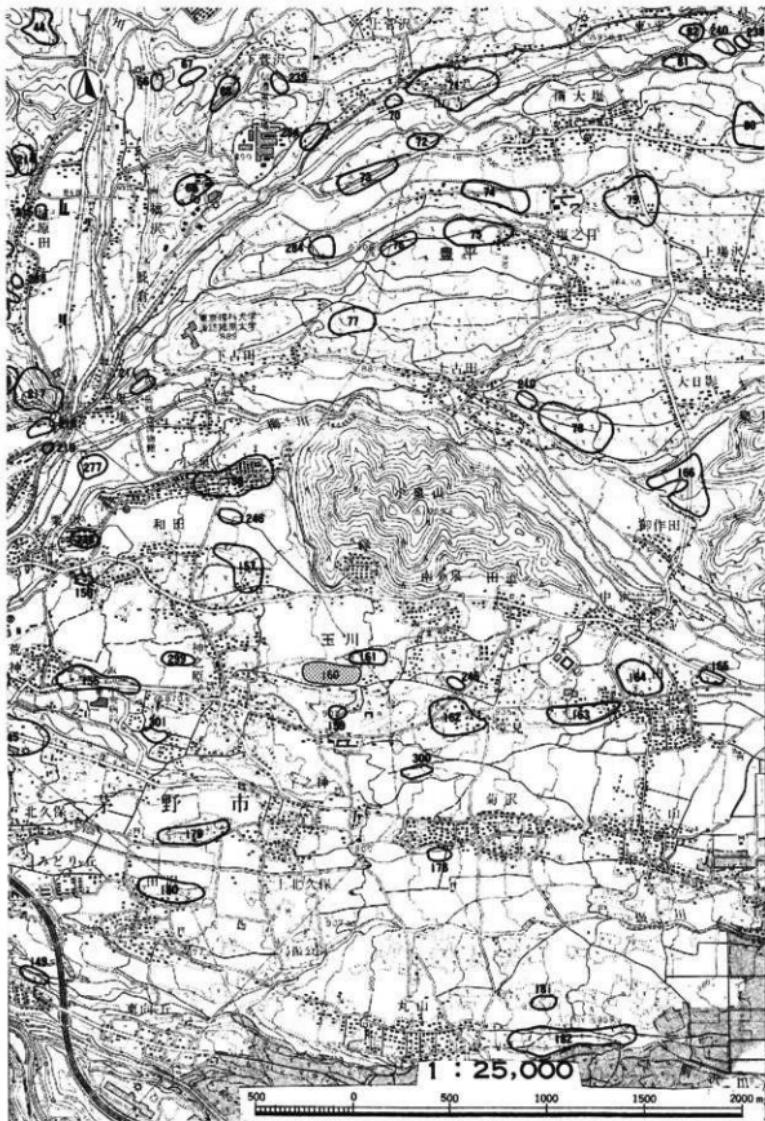
平成7年度の調査開始に先立ち、平成7年2月1日付け6課地土第460号で諏訪建設事務所長名から埋蔵文化財発掘通知（文化財保護法第57条第3項）が提出され、文化庁長官宛に進達を行なう。これを受け、市教育委員会では3月1日付け（文化財保護法第98条第2項）を、文化庁長官宛に提出する。

その後、4月18日に諏訪地方事務所上地改良課と現地打ち合せ、4月26日に市建設開発対策室と現地にて、プレハブ設置箇所、駐車場について打ち合せを行ない、5月1日付けで諏訪地方事務所長と市長との間で小堂見遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を締結した。契約金額は新たに現地を視察し積算した結果、13,750,000円とした。

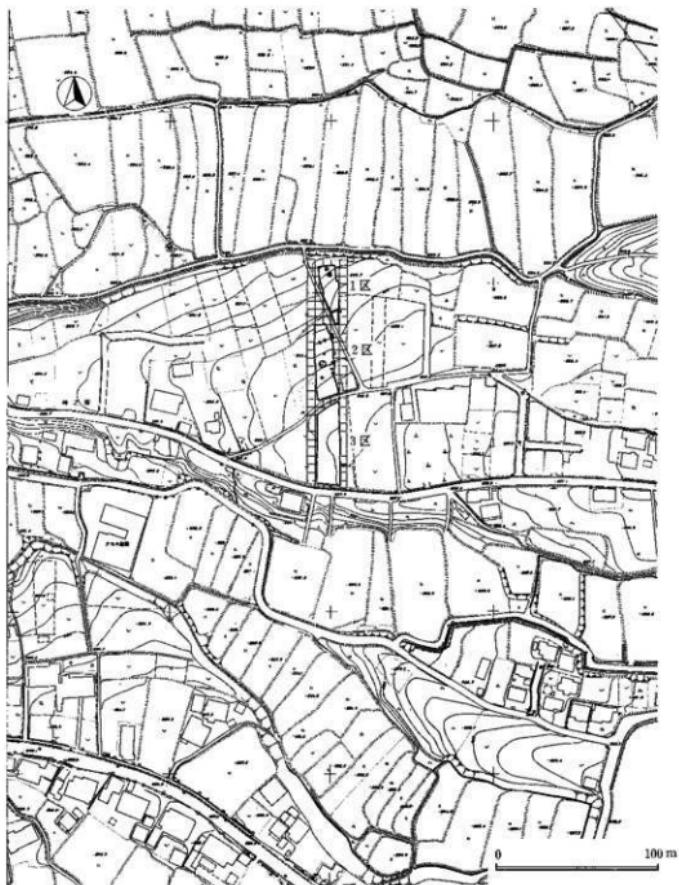
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

小堂見遺跡の今回調査を行なった範囲は、その大部分の小字名を細畠（ほそばた）といい、北側には的場（まとば）の小字名も含まれている。これより東側に上宮ノ上（うえみやのうえ）、小堂見（こどみ）等の小字名が続く。今回調査した地区は、小堂見遺跡の中でも西端に近い位置にあたり、遺跡の主体は小堂見と呼ばれる箇所になると考えられるため、遺跡名は從来通り小堂見遺跡のまとまる。なお、昭和61年に刊行された「茅野市史」上巻には「こどうみ」との表記があるが、ここでは「茅野市字名地図」（平成2年）および地元の人々の用いる「こどみ」の呼称を採用する。

小堂見遺跡は「茅野市史」上巻によれば「玉川小学校校庭の北側の尾根状台地で、標高は九〇〇mである。尾根の南斜面を東西の道が通じ、この両側の傾く面に遺物が散布している。浅い水田の谷を隔てて南側台地には久保川遺跡、北側台地には上御前遺跡が立地する。縄文時代中期の土器片や打製石斧・石匙が採集されたが、未発掘の為詳細は不明である。位置および地形からこれら三遺跡の中では中核的な遺跡と推定される。



第1図 小堂見遺跡の位置 (1/25,000)



第2図 周辺の地形と発掘区 (1/3,000)

近時急速に宅地化されつつあり早急な調査が望まれる。」とされているだけである。しかし、今回の調査箇所が遺跡の西端に位置し、事前の表面採集でも黒曜石片が僅かに拾えただけであり、ここを耕作していた元の地主さんからも遺物を拾ったことがないとの話も得ていることから、集落の端にあたり、遺構や遺物の検出・出土は余り望めないのでないかとの予測を立てた。

小堂見遺跡は、その存する長峰状の尾根のうち、約28,000m²が遺跡として遺跡地図に記されている。その内の西側に南北に走る農道建設が計画され、約1,900m²が遺跡にかかった。これに地形的に隣接する範囲を加えた約2,030m²を調査の対象とすることとした。

小堂見遺跡は小泉山の南に位置し、小泉山の西には霧ヶ峰山塊である草山がわずかに見える。日を西に転じると永明寺山と赤石山脈に続く守屋山系との間から北アルプスの穂高岳を望むことができる。南は北岳、甲斐駒ヶ岳までを望むことができる。東は小泉山に阻まれ蓼科山は望めないが、それより南の八ヶ岳連峰は一望できる。

第III章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

新年度になって数回現地に行き打ち合せを行なったが、その際黒曜石2点を採集しただけで、土器や石器は拾うことができなかつた。遺跡の中心はここよりも東側と考えられることから、多くの遺構の検出は望めないのでないかとの予測を立てながら、調査に望んだ。

調査は道路敷きという狭い範囲での調査であり、全面調査を行なうにあたり、廃土の処理に支障をきたすことになった。そこで、尾根の頂部については表土を全面剥ぎ、北側へ緩く傾斜する斜面についてはトレーンチをあけ、遺構や遺物の分布を見ながら漸次拡張していく方法をとることとした。

第2節 調査の経過

遺跡の調査に先立ち、調査範囲の全体を覆うように東西南北にあわせて5m四方の正方形のグリッドで区切り、x軸を大文字のアルファベット、y軸を数字で呼称し、A1のように名前を付ける作業を行なった。

また、調査範囲に、東西に2本の小さな道が走っていたため、この道を境に南から1区、2区、3区と3地区に分けて呼称することにした。

表土剥ぎは、台地の頂部にあたる南側の1区から行なつた。慎重に表土層を剥ぎ取つてはいたが、ローム面までが非常に浅く、20cmに満たないところもあるほどであった。表土の剥ぎ取りがやや北に移り、緩やかに北側に傾斜する頃になって、ようやく遺物が出土し始めるが、量はごく僅かで、遺構についてはまったく検出できない状況であった。

北側の斜面の中間にあたる2区の南側を、1区の廃土置き場としたため、3区より遺構の検出がありそうな2区の廃土置き場を作るため、3区から表土剥ぎを行なつた。ところが、3区の南側で土坑がまとまって検出し始め、調査の計画が大きく狂ってしまった。そこで、3区の遺構調査を先に終わらせ、そこを廃土置き場とすることにし、3区の廃土を2区へ運ぶことにした。

3区では、9基の土坑が検出され、さらに2区へ向かう北側は、深い谷となっており、そこに遺物の包含層が確認された。これらの遺構の調査と、遺物包含層の掘り下げにかなりの時間を要した。

2区の調査が最後となった。2区からは縄文時代中期初頭の住居址1軒が検出できた他、土坑も8基が検出されている。また、3区での調査で検出された深い谷が2区の北側でも検出され、多くの遺物の出土を見た。

調査開始当初と、7月後半の長雨で、遺構の数の割りに多くの調査期間がかかってしまったが、8月4日、空撮を行ない、調査のすべてを終了した。

調査日誌抄

5月15日（月）雨

重機借り上げ契約を締結し、本日より表土剥ぎに入る予定であったが、雨のため中止とする。

労災手続き。

5月16日（火）雨

朝まで降り続いた雨のため、重機が動くことができず、表土剥ぎ作業を中止とする。

5月17日（水）曇り

本日より表土剥ぎに入る。表土剥ぎは尾根の頂部にあたる南側から行なうことにする。まず、表土層にあたる耕作土だけを取り除く作業を行なうが、表面採集では黒曜石片を中心に、土器片も数点拾うことができるなどや期待が持てそうになってきた。

5月18日（木）晴れ

昨日まで南側の畑の耕作土を剥ぎ終わったが、その後ローム面までの剥ぎ取りを行なう。遺構は小さなピットになるかと思われる落込みがいくつか検出された他、炭焼き窯が1基検出された。また、終了間際にあって黒色土の覆土を持つ比較的大きな落込みが検出されそうになったが、西日が強く見極めが難しかったため、明日に持ち越す。

5月19日（金）晴れ

上捨て場確保のため、最も遺構の検出の可能性の少ないと思われる北側についてトレント調査を行ない、遺構のないことを確認する予定であったが、土坑の検出がいくつか見られた。そのため、北側については全面表土層を剥ぐことにし、とりあえずの土捨て場は他の場所にすることにする。また、かなり広い範囲で黒色土の落込みを検出した。住居址等の遺構になるかどうかはまだ不明であるが、縄文土器片も出土している。

午後、発掘機材の搬入を行なう。

5月22日（月）雨

雨のため、作業を中止する。プレハブとトイレの搬入。

5月23日（火）晴れ

本日より作業員が入り、遺構確認調査に入る。遺構確認は南側から行なう。同時に東壁の清掃を行ない、土層確認に備える。

5月24日（水）晴れ

遺構確認作業は南側を終了する。南に行くにしたがって包含層が存在し、若干の土器片と黒曜石片が出土する。

表土剥ぎは南側を終了した後、北側の斜面下側から行なってきたが、中央の土置き場を除きほぼ終了する。今後北側斜面の調査を終了させた後、重機で廻上を移動し調査することにする。

5月25日（木）晴れ

表土剥ぎは中央に移る。以前桑畠だったがしばらく荒れ地となっていたところで、遺構確認に時間がかかる。

径50cmほどの土坑が数基と、住居址になるのではないかと思われる大きな掘り込みを検出することができた。

5月26日（金）晴れ

第2区の遺構確認を終了し、第3区の遺構確認に入る。

第2区は北側の黒色土の上面から横刃形石器や磨製石斧が出土する。褐色土の中に黒色土が円形になっているかの様に見える箇所があるが、住居址になるかもしれない。遺物はこの黒色土の部分から出土している。

第3区については南側の黒色土の部分の遺構確認を後にし、ローム面での遺構確認を優先させる。黒色土を覆土とする土坑が数基検出される。

5月29日（月）雨

雨のため作業を中止する。

5月30日（火）晴れ

第3区南側の黒色土の遺構確認と東壁の清掃を行なう。黒色土からは打製石斧をはじめ、土器片がかなり出土しており、谷部とは言え期待が持てる。これですべての範囲の遺構確認を終了したので、明日

以降遺構の掘り下げと谷部の調査に入る予定。

5月31日（水）晴れ

第3区北側の土坑から掘り下げを開始する。平面確認で土坑になると思われたもののいくつかは、非常に浅く底面の凹凸が激しいもので、人為的なものと認めがたいものとなった。しかし多くはかなり深い壁を持つしっかりした土坑である。

6月1日（木）晴れ

第3区の土坑の半数を継続して行なう。土坑は北側から順に番号を付けはじめ、8号土坑までを付す。

6月2日（金）晴れ後曇り

第3区の土坑の土層堆積状態の写真撮影と土層断面図作成を行なう。土層堆積状態の写真撮影は1号土坑から8号土坑まで、土層断面図の作成は1号土坑から6号土坑までと8号土坑を行なった。7号土坑については單一層のため、土層観察のみを行なつただけで図面の作成は行なわなかった。

また、図面作成後土坑の完掘作業と完掘状態の写真撮影を行なう。写真撮影は1号土坑から3号土坑までを行なった。

6月5日（月）晴れ後曇り

第3区の土坑4～8号土坑を完掘し、写真撮影と平面図作成を行なう。

第3区南側の谷状地形の掘り下げを行なう。遺物は土器片のはか黒曜石片が出土し、期待が持てる。

6月6日（火）曇り

第3区北側の谷状地形の掘り下げを継続して行なう。出土遺物の中には縄文時代中期初頭の土器片も数点見られる。

6月7日（水）晴れ

第3区南側の谷状地形の掘り下げを継続して行なう。遺物は黒褐色土上面で止り、ローム面に近くになると小砾が混じる。東西に走る溝も検出されたが、縄文時代の遺物包含層である黒褐色土を掘り込んでいることから、かなり新しいものであると考えられる。

6月8日（木）曇り

第3区南側の谷状地形の掘り下げを終了し、遺物

出土状態の写真撮影を行なう。

第2区北側の谷状地形の掘り下げに入る。

6月9日（金）雨

雨のため作業中止。

6月12日（月）晴れ

第3区の遺物出土状態の平面図作成と取上げ。

第2区北側の谷状地形の掘り下げを継続して行なう。

6月13日（火）雨

雨のため作業中止。

6月14日（水）曇り後雨

第2区北側の谷状地形の掘り下げを継続して行なう。

午後から雨となったため、作業を中止し、室内作業を行なう。

6月15日（木）曇り時々雨

第2区北側の谷状地形の掘り下げを継続して行なう。

6月16日（金）晴れ

第2区北側の谷状地形内の遺物出土状態の写真撮影と、遺物分布図作成・遺物取上げ。

6月19日（月）晴れ

第2区の遺構検出作業。

第3区の溝の掘り下げと平面図の作成。東壁セクション図の作成。

6月20日（火）晴れ

第2区で検出した住居址と土坑の掘り下げ。

土坑は陥り穴で、長軸が等高線と直交している。住居址は北半が削られ、プランが明確でない。ほぼ中央から埋廐が検出された。

6月21日（水）晴れ

第2区土坑土層断面図作成と、完掘作業。

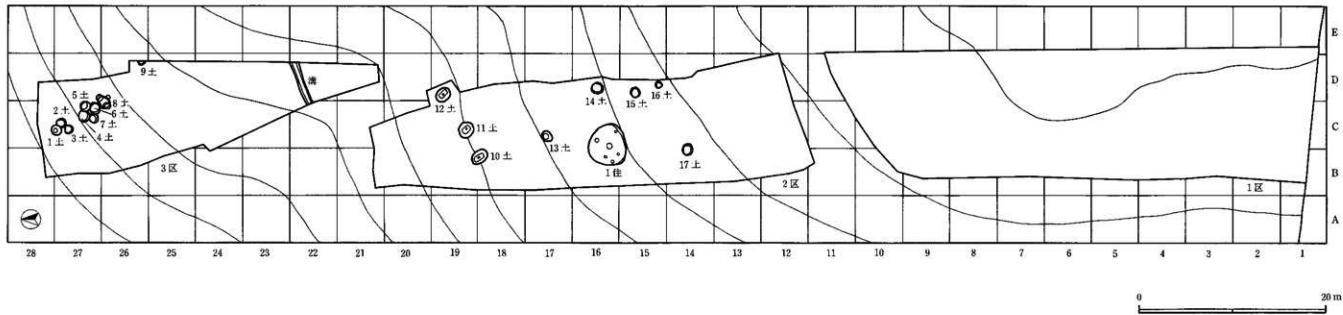
住居址の掘り下げ作業。

6月22日（木）晴れ

第2区住居址の掘り下げと遺物出土状態の写真撮影を行なう。

土坑の検出と掘り下げ。

6月26日（月）曇り時々雨



第3図 発掘区と遺構の分布 (1/400)

第2区住居址の遺物の取上げ後、完掘状態と埋甕炉の写真撮影を行なう。14号土坑の上層断面図の作成、15～17号土坑の完掘状態の写真撮影と平面図の作成作業。第2区西壁の清掃と分層作業。	第3区土坑コンタ計測。8号土坑エレベーションポイントを平面図に記入する。
基準杭測量開始。	7月3日（月）雨
6月27日（火）晴れ	第1区土坑の完掘作業を行なう。10時過ぎから雨となる。昼まで待機するが止まないため、作業を中止とする。
第2区1号住居址の完掘状態と埋甕炉の写真撮影を再度行なう。エレベーション図・平面図の作成。14号土坑の完掘と写真撮影、平面図作成。	7月7日（金）曇り
10・11号土坑の平面図作成。	第1区東壁セクション図作成。土坑の完掘の終わったものから平面図作成に入る。遺物分布図作成。
12号土坑のセクション図作成。	7月10日（月）晴れ
第1区の遺構検出作業開始。	第1区平面図と地形図の作成。
水準点測量開始。	7月11日（火）晴れ
6月28日（水）晴れ	第1区の図面の修正作業。
第2区12号土坑完掘。	第2区北側の拡張と遺物の取上げ。
第2区西壁のセクション図作成。	一時小室見跡の作業を中断し、新井下遺跡へ機材を搬出する。
第1区遺構検出作業を行なう。	7月28日（金）晴れ
6月29日（木）晴れ	第2区南側の表土剥ぎ作業を重機にて行なう。
第2区全体図（地形図）作成。	7月29日（土）晴れ
第3区全体図（地形図）作成。8号土坑エレベーション図作成。	第2区南側の表土剥ぎ作業。
第1区遺構の検出と掘り下げを行なう。	8月3日（木）晴れ
6月30日（金）晴れ	空撮のための清掃作業を行なう。
第1区土坑半裁作業を終了し、セクション図作成を行なう。東壁の清掃と土層断面観察。	第1区と第2区の全体図の補備測量を行なう。
第2区北側の土器集中範囲を部分的に拡張する。	8月4日（金）晴れ
	空撮。

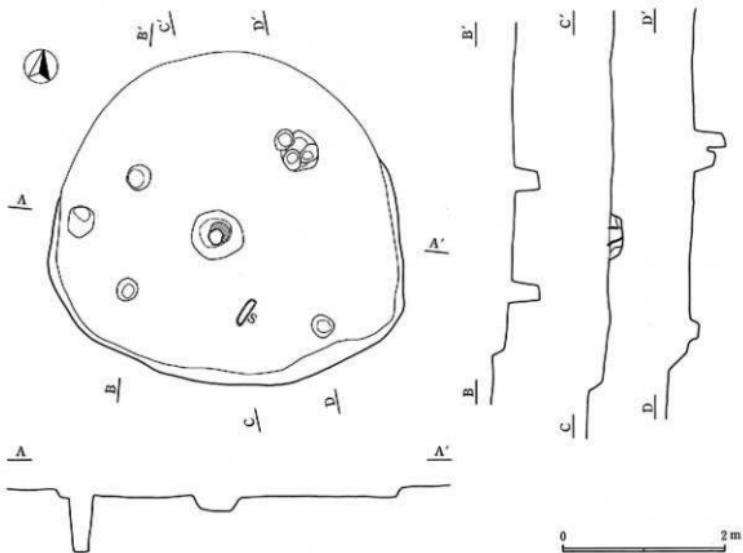
第IV章 遺構と遺物

第1節 住居址

1号住居址（第4図、図版1）

2区B・C-15・16に位置する。平面形態は、北側が削平されており明らかでないが、残った南半の様子から隅丸方形を呈していたのではないかと思われる。規模は、東西が430cm、壁高は25cmを測る。北半の壁は検出できていない。周溝は検出されなかった。柱穴は5ヵ所に認められ、その内北東のものは4箇が重複している。炉は埋甕炉で、どちらかと言うと中央より南に寄ったところに位置する。

覆土は、暗褐色土の單一層で、粒子は細かく、よく結っているが、粘性はない。5mm以下のロームブロックも少量混じる。炭化物はごく小さいものが炉の東側から南側にかけての狭い範囲で認められた。



第4図 1号住居址 (1/60)

遺物は、埋甕炉に用いられた土器を除いてごくわずかで、器形を窺えるものはなかった。

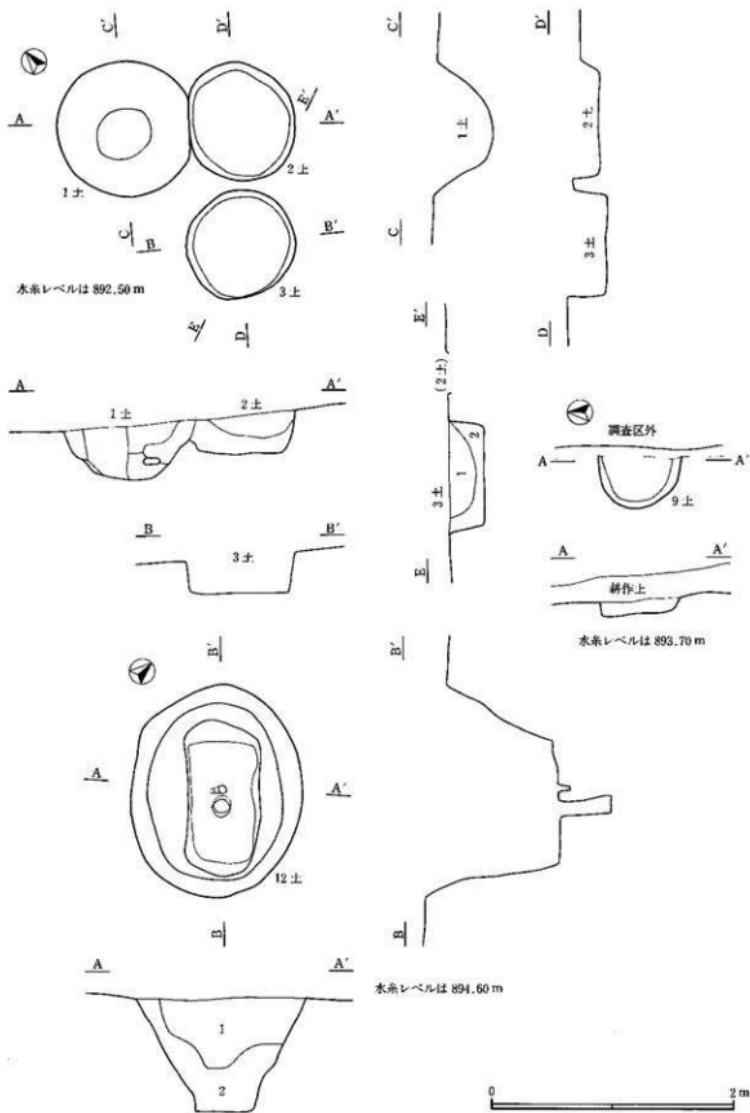
第2節 土坑

1号土坑 (第5図、図版2-1)

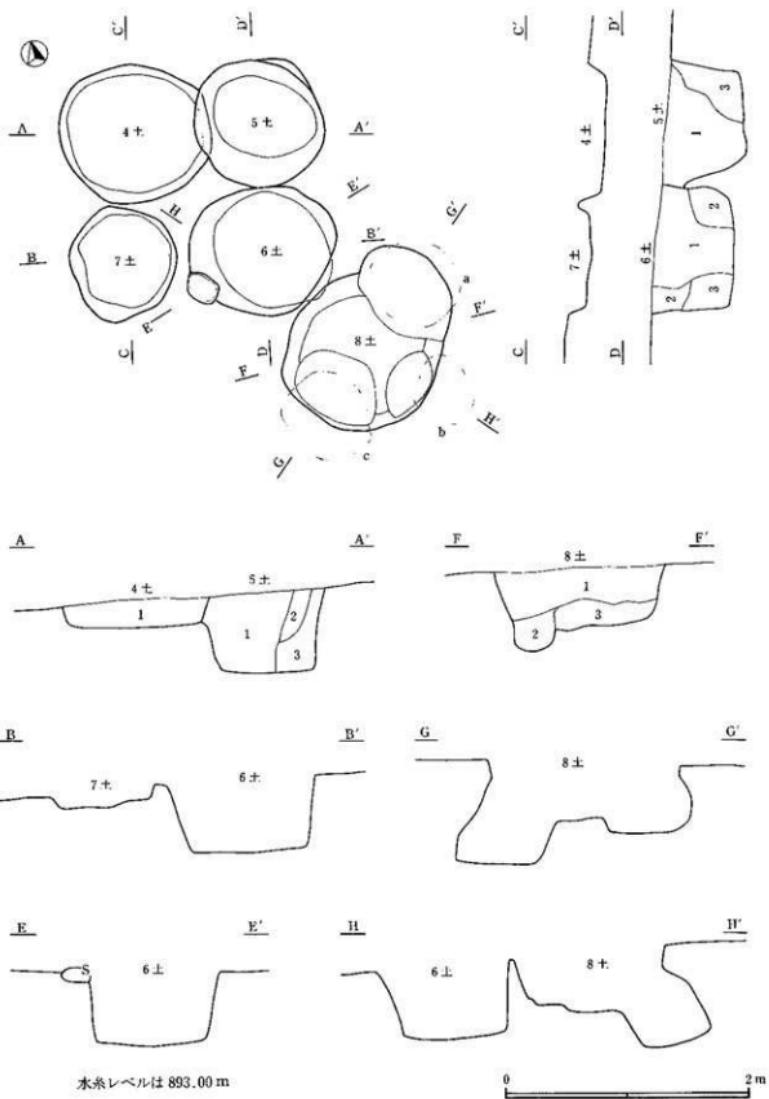
3区C-27・28に位置する。平面形・底面形共円形、断面形は擂鉢形を呈する。規模は、長径113cm、短径109cm、底面長径47cm、底面短径40cm、深さ49cmを測る。焼け礫が3個出土している。覆土は5層に分層が可能である。1層は暗褐色土で、粒子は細かいが、粘性や繊りはない。5mm以下のロームブロック、1mm以下のローム粒子を多量に含む。2層は黒褐色土で、粒子は細かいが、粘性や繊りはない。1・2層共搅乱か。3層は黒褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。1mm以下のローム粒子を少量含む。4層は暗褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。1mm以下のローム粒子を多量に含む他、ロームブロックの混入も多いため、やや黄味が強い。5層は暗褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。5層に近いが、ロームブロックの混入は少ない。

2号土坑 (第5図、図版2-2)

3区C-27に位置する。平面形・底面形共円形、断面形はたらい形を呈する。規模は、長径98cm、短径86cm、底面長径87cm、底面短径79cm、深さ36cmを測る。長軸方向はN-23°-Eを指す。焼け礫3個が出土している。覆土は2層に分層が可能である。1層は黒褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。1mm以下のローム粒子を少量含む。2層は暗褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。1mm以下のローム粒子を多量に含む他、2cm以下のロームブロックも少量見受けられる。



第5図 1~3・9・12号土坑 (1/40)



第6図 4~8号土坑 (1/40)

3号土坑（第5図、図版3-3）

3区C-27に位置する。平面形・底面形共円形、断面形はたらい形を呈する。規模は、長径91cm、短径85cm、底面長径83cm、底面短径76cm、深さ35cmを測る。長軸方向はN-64°Eを指す。覆土は2層に分層が可能である。1層は暗褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。1mm以下のローム粒子を少量含む。2層は暗褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。1mm以下のローム粒子の混入は、1層より多い。

4号土坑（第6図、図版3-2）

3区C-27に位置する。平面形・底面形共長円形、断面形は皿形を呈する。規模は、長径122cm、短径111cm、底面長径107cm、底面短径97cm、深さ23cmを測る。長軸方向はN-79°Wを指す。覆土は黒褐色土の單一層で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。1mm以下のローム粒子、5mm以下のロームブロックの混入がわずかに認められる。

5号土坑（第6図、図版3-2・3）

3区C-27に位置する。平面形は円形、底面形は楕円形、断面形はたらい形を呈する。規模は、長径109cm、短径107cm、底面長径86cm、底面短径62cm、深さ70cmを測る。長軸方向はN-55°Wを指す。覆土は3層に分層が可能である。1層は黒褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。1mm以下のローム粒子と5mm以下のロームブロックをごくわずか含む他、3cm以下のロームブロックがまばらに入る。2層は暗褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。1mm以下のローム粒子を多量に含む他、にごったロームが塊状に入る。5mmほどの炭化物を少量含む。3層は暗褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。1mm以下のローム粒子を多量に含む他、にごったロームが斑状に入る。

6号土坑（第6図、図版3-2・3）

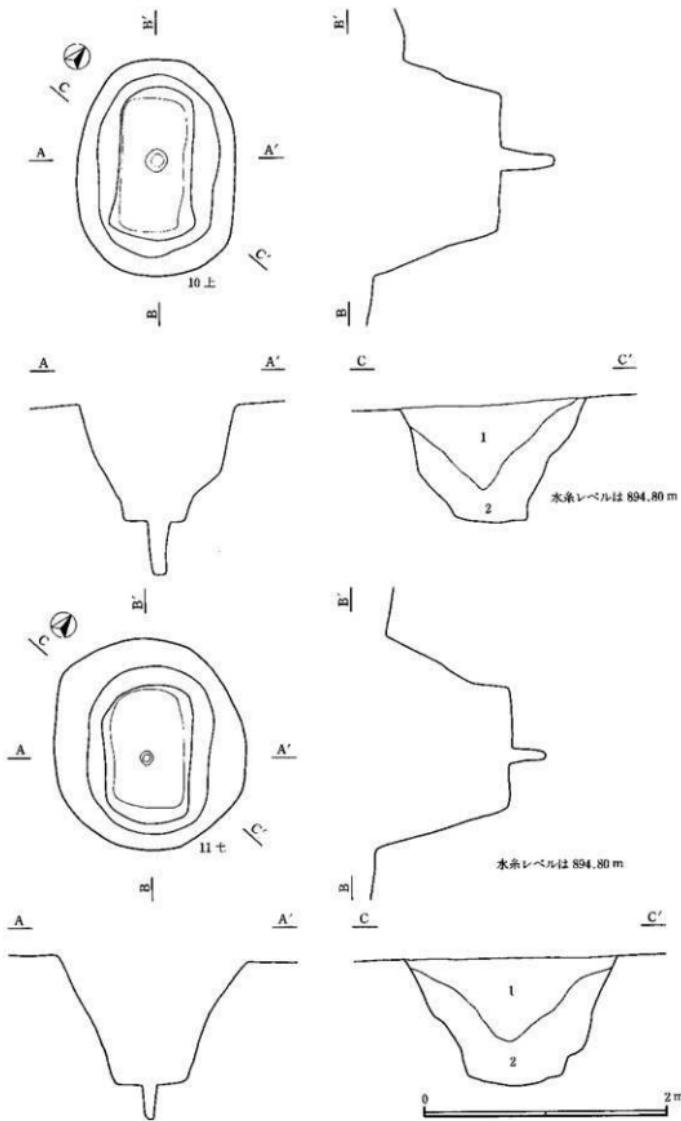
3区C-27に位置する。平面形は隅丸五角形、底面形は不整円形、断面形はたらい形を呈する。規模は、長径123cm、短径105cm、底面長径103cm、底面短径88cm、深さ68cmを測る。長軸方向はN-87°Eを指す。覆土は3層に分層が可能である。1層は黒褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。1mm以下のローム粒子が少量入る他、3cm以下のロームブロックがまばらに入る。2層は暗褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。1mm以下のローム粒子を多量に含む他、2cm以下のロームブロックを少量含む。3層は暗褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。1mm以下のローム粒子を多量に含む他、5cm以下のロームブロックを多量に含む。

7号土坑（第6図、図版3-2・3）

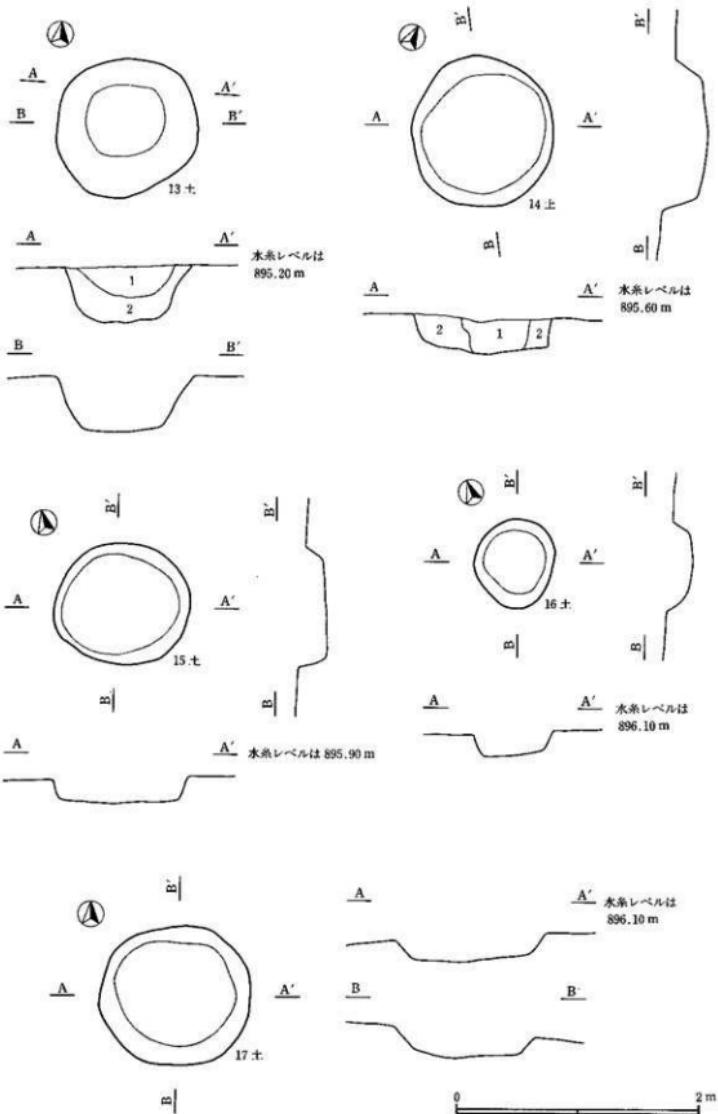
3区C-27に位置する。平面形・底面形共不整円形、断面形は皿形を呈する。規模は、長径92cm、短径86cm、底面長径77cm、底面短径75cm、深さ20cmを測る。長軸方向はN-32°Eを指す。覆土は暗褐色土の單一層。粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。ローム粒子の混入が多く、1mm以下のロームブロックも少量入る。

8号土坑（第6図、図版4-1）

3区C-D-26・27に位置する。平面形・底面形共不整円形。坑底に袋状となる3つの穴がある。北東をa、南東をb、南西をcとする。断面形はたらい形を呈する。規模は、長径130cm、短径122cm、底面長径94cm、底面短径108cm、深さ55cmを測る。長軸方向はN-47°Wを指す。bから碟が2個、cから上器片と碟が各1個出土。覆土は3層に分層が可能である。1層は黒褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。1mm以下のローム粒子を少量、2cm以下のロームブロックを少量含む。2層は暗褐色土で、粒子は細かく



第7図 10・11号土坑 (1/40)



第8図 13~17号土坑 (1~40)

いが、粘性や締りはない。1mm以下のローム粒子を多量に含む他、1cm以下のロームブロックも多量に入る。cの穴の埋土か。3層は明褐色土で、粒子は細かく、よく締っているが、粘性はない。3cmほどにロームが充填され、その間にローム粒子が入る。袋状となる穴の覆土は、aが明褐色土。全体が指頭大のロームブロックからなる。bも明褐色土。拳大の大きなロームブロックが多量に入る。cは黒色土。3つの袋状の穴が付属する。覆土の様子から3つの穴が同時にあったのではなく、南西隅の穴が新しいと考えられるが、他の2つについては新旧関係は不明である。

8号土坑（第5図）

3区D-26に位置する。調査区外にかかっており、全体の形状は明らかでないが、平面形・底面形共長円形になるものと思われる。断面形は皿形を呈する。規模は、長径67cm、底面長径57cm、深さ15cmを測る。覆土は暗褐色土。耕作土に似る。

10号土坑（第5図、図版6-1・2）

2区B-18・19に位置する。平面形は梢円形、底面形は隅丸長方形、断面形は短軸Y字形を呈する。規模は、長径178cm、短径128cm、底面長径110cm、底面短径50cm、深さ104cmを測る。長軸方向はN-38°-Wを指す。覆土は2層に分層が可能である。1層は黒褐色土で、粒子は細かく、よく締っているが、粘性はない。ローム粒子やロームブロックの混入はあるが、量は少ない。2層は暗褐色土で、粒子は細かく、よく締っており、粘性もある。陥し穴。坑底にピット1。

11号土坑（第7図、図版6-2）

2区C-19に位置する。平面形は梢円形、底面形は隅丸長方形、断面形は鉢形を呈する。規模は、長径175cm、短径156cm、底面長径97cm、底面短径57cm、深さ110cmを測る。長軸方向はN-42°-Wを指す。覆土は2層に分層が可能である。1層は黒褐色土で、粒子は細かく、よく締っているが、粘性はない。ローム粒子やロームブロックの混入はあるが、量は少ない。2層は暗褐色土で、粒子は細かく、よく締っており、粘性もある。陥し穴。坑底にピット1。

12号土坑（第7図、図版7-1）

2区C-D-19に位置する。平面形は梢円形、底面形は隅丸長方形、断面形は短軸Y字形を呈する。規模は、長径174cm、短径137cm、底面長径100cm、底面短径48cm、深さ109cmを測る。長軸方向はN-49°-Wを指す。覆土は2層に分層が可能である。1層は黒褐色土で、粒子は細かく、よく締っているが、粘性はない。ローム粒子やロームブロックの混入はあるが、量は少ない。2層は暗褐色土で、粒子は細かく、よく締っており、粘性もある。坑底に2個のピットがあるが、覆土はまったく異なっている。南側のピットは暗褐色土で、ローム粒子の混入が多く、硬くよく締っている。10号土坑・11号土坑の坑底ピットも同じである。北側のピットは、斜に掘り込まれており、覆土は黒褐色土で、ほそぼそとしており、軟らかい。陥し穴。坑底にピット2。

13号土坑（第8図、図版4-2）

2区C-7に位置する。平面形・底面形共円形、断面形はを呈する。規模は、長径115cm、短径112cm、底面長径63cm、底面短径59cm、深さ50cmを測る。長軸方向はN-07°-Eを指す。覆土は2層に分層が可能である。1層は黒褐色土で、粒子は細かく、よく締っているが、粘性はない。ローム粒子が少量混じる。2層は暗褐色土で、ローム粒子やロームブロックの混入が多い。

14号土坑（第8図、図版4-3）

2区D-16に位置する。平面形は円形、底面形は長円形、断面形は皿形を呈する。規模は、長径123cm、短

径115cm、底面長径102cm、底面短径94cm、深さ34cmを測る。長軸方向はN 37°-Wを指す。覆土は2層に分層が可能である。中央の1層は黒褐色土で、粒子は細かく、よく締っているが、粘性はない。1mm以下のローム粒子と1cm以下のロームブロックをそれぞれ少量含む。炭化物も少量見られる。2層は暗褐色土で、粒子は細かく、よく締っているが、粘性はない。ローム粒子の混入が多い他、1mm以下のロームブロックを少量含む。

15号土坑（第8図、図版5-1）

2区D-15に位置する。平面形・底面形共橢円形、断面形は皿形を呈する。規模は、長径111cm、短径98cm、底面長径96cm、底面短径82cm、深さ23cmを測る。長軸方向はN 86°-Eを指す。覆土は暗褐色土。粒子は細かく、よく締っているが、粘性はない。ローム粒子・ロームブロックの混入は少ない。炭化物の混入もない。

16号土坑（第8図、図版5-2）

2区D-15に位置する。平面形・底面形共不整円形、断面形は皿形を呈する。規模は、長径74cm、短径65cm、底面長径52cm、底面短径50cm、深さ22cmを測る。長軸方向はN 19°-Eを指す。覆土は黒褐色土。粒子は細かく、よく締っているが、粘性はない。にごったロームブロックが斑状に入る。

17号土坑（第8図、図版5-3）

2区B・C-14に位置する。平面形は円形、底面形は不整円形、断面形は皿形を呈する。規模は、長径125cm、短径114cm、底面長径91cm、底面短径84cm、深さ25cmを測る。長軸方向はN 78°-Eを指す。覆土は黒褐色土。粒子は細かく、よく締っているが、粘性はない。微細なローム粒子を少量含む。壁際の方がローム粒子の混入が多いが、分層は難しい。

第3節 遺構外の遺物

今回の調査範囲の南側のある尾根の平坦部は、調査前の表面採集でもほとんど遺物が見られなかつたが、調査の結果、遺構は検出されず、遺物もほとんど出土しなかつた。

それに対し、尾根の北側斜面では、予想に反し、住居址が1軒検出された他、土坑も17基が検出された。この2区と3区の間の現道となっているところに、北西に延びる浅い谷が入っており、多くの遺物が出土している（図版7・8）。遺物は2区で検出された縄文時代中期初頭の住居址とほぼ同時期のものである。ほとんどが破片での出土で、残念ながら復元により器形を窺うことのできたものはない。

第V章　まとめ

小堂見遺跡は、約28,000m²が遺跡地図に記されている大きな遺跡である。その遺跡の西側の端に南北に走る農道建設が計画され、約1,900m²が遺跡にかかった。これに地形的に隣接する範囲を加えた約2,030m²を調査の対象とすることとした。

小堂見遺跡は、過去において縄文時代中期後半の遺物を採集していること、平安時代の住居址を調査していることにより、今回の調査も該期の遺構の検出が予想されていた。しかし、今回の調査箇所が遺跡の西端に位置し、事前の表面採集でも黒曜石片が僅かに拾えただけであり、ここを耕作していた元の地主さんからも遺物を拾ったことがないとの話も得ていることから、集落の端にあたり、遺構や遺物の検出・出土は余り望めないのでないかとの予測を立てながら調査を開始した。

それでも実際に調査を行なってみると、尾根の頂部では遺構は検出されなかったものの、北側へ向かう緩斜面でいくつかの遺構が検出された。検出された遺構は縄文時代中期初頭の住居址と、それに伴うと考えられる土坑群、時期不明の陥り穴だけであった。

縄文時代中期初頭の住居址は、本遺跡では初めての検出である。約28,000m²という大きな遺跡として範囲を示されている本遺跡が、少しずつ範囲を変えて存する、様々な時期の遺跡の複合であることが理解される。

本遺跡は、宅地開発によって、徐々に遺跡の姿を変えつつあるが、今後も遺跡の全容を把握すべく、努力していきたい。

先に、尾根の頂部は遺構が検出されなかつたと述べたが、最初から遺構が作られなかつたのか、あつたものがその後の耕作などにより、削平されてしまったのかは、不明である。しかし、遺物の採集がほとんどできなかつたことや、南側にある深い谷へいく傾斜などを考えると、尾根の頂部には、最初から遺構が作られなかつたと考えてよいのではないかと思われる。これに対し、通常遺構の検出の少ない北向きの斜面で住居址や土坑などの遺構が検出された背景には、北側の谷へ向かう傾斜が緩やかであったためと考えられる。

なお、本遺跡における当初の調査予定面積は2,030m²であったが、範囲内にある現道の調査ができなかつたこと、周辺に土砂の崩落を考慮した一定の幅を確保したことなどにより、実際に調査した面積は1・2・3区合せて1,420m²であった。

おわりに

本遺跡の発掘調査は、開始当初の梅雨と、終了間際の長雨によって、当初の見込以上にかなり多くの期間を要してしまった。発掘調査の開始から終了まで、周辺の皆さんには、砂塵や風雨による土砂の流出など、多大な迷惑をおかけした。それにもかかわらず、調査に関心をもたれ、さらに調査終了まで暖かく見守っていただいた。周辺の皆さんに感謝したい。

また、発掘調査に参加された方たちには、雨で作業が飛び飛びになる中、最後まで協力いただいた。感謝を申上げ、本報告書の終わりとしたい。

図 版



1.1号住居址（北から）

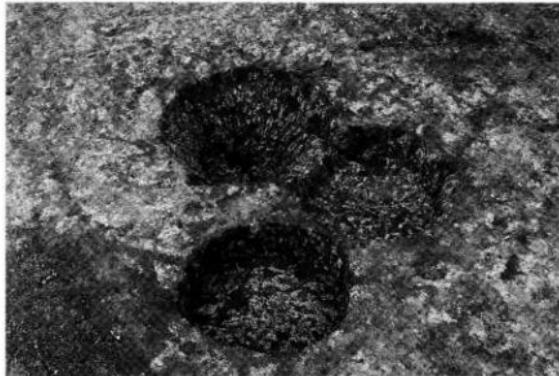


2.1号住居址（埋藏部）
(東から)

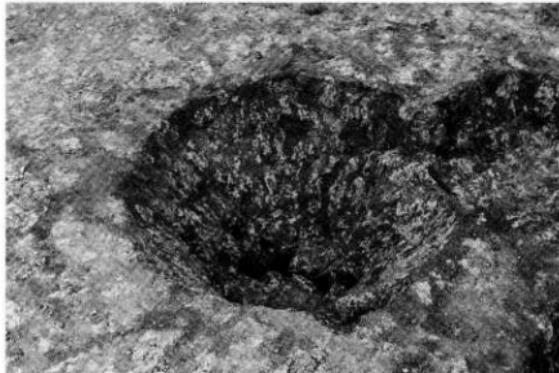


3.3区1～8号土坑
(北東から)

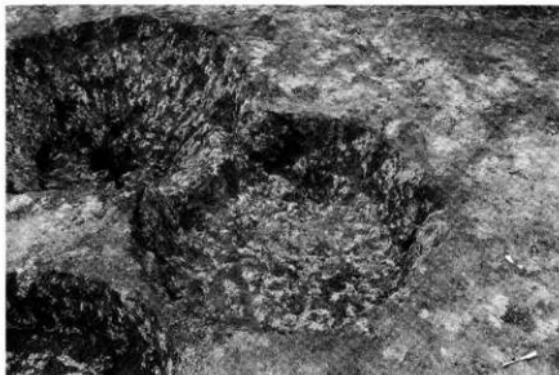
図版 2



1.3区 1～3号土坑（南から）



2.3区 1号土坑（南から）



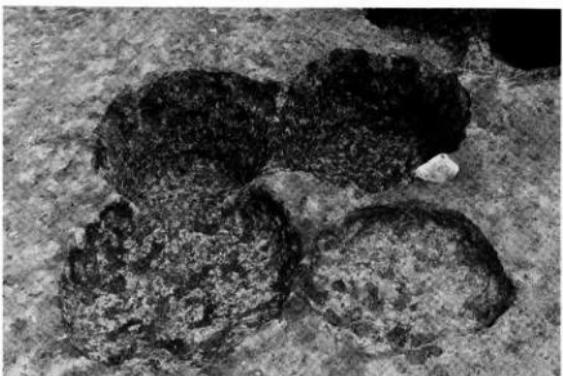
3.3区 2号土坑（南から）



1.3区 3号土坑(南から)

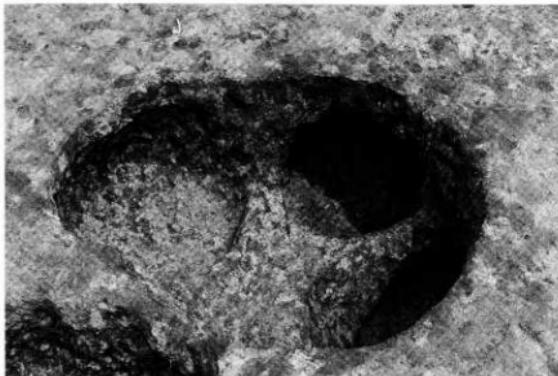


2.3区 4～8号土坑(南から)

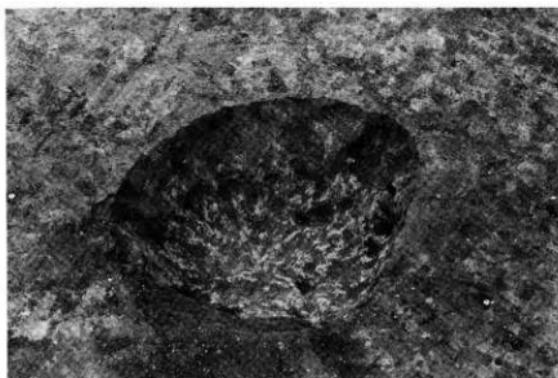


3.3区 4～7号土坑
(西から)

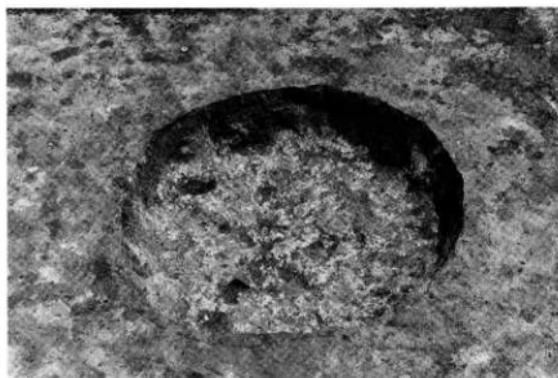
図版 4



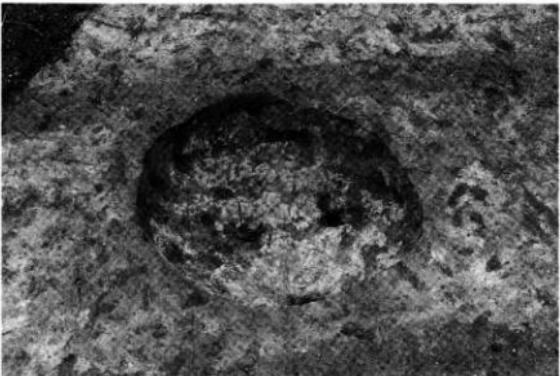
1,3区8号土坑（西から）



2,2区13号土坑（南から）



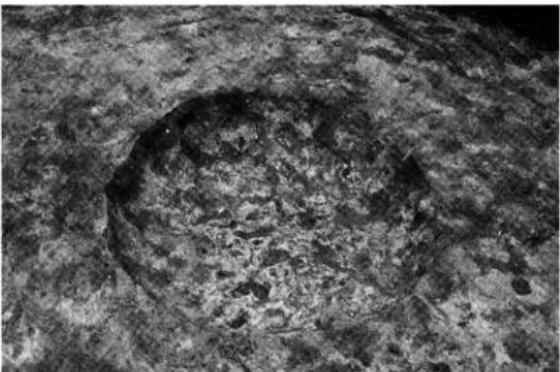
3,2区14号土坑（西から）



1. 2区14号土坑（北から）



2. 2区16号土坑（西から）



3. 2区17号土坑（北から）

図版 6



1, 2区10~12号土坑（西から）



2, 2区10号土坑（北から）



3, 2区11号土坑（北から）



1. 2区12号土坑（北から）

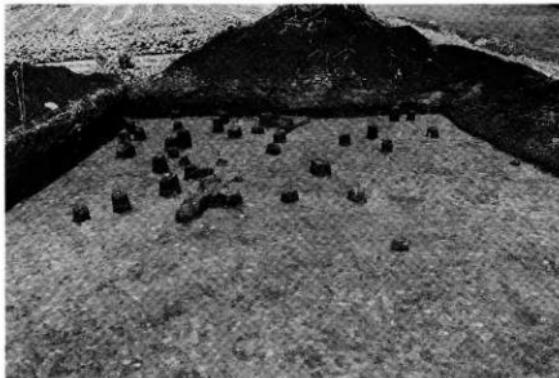


2. 3区北側遺物出土状態
(北から)



3. 3区北側遺物出土状態
(北東から)

図版 8



1. 2区南側遺物出土状態
(南から)



2. 2区南側遺物出土状態
(東から)



3. 2区1号住居址出土土器

報告書抄録

ふりがな	こどみいせき							
書名	小堂見遺跡							
副書名	ふるさと農道整備事業玉川地区埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	小林 深志							
編集機関	茅野市教育委員会							
所在地	〒391 茅野市塚原二丁目6番1号 Tel 0266-72-2101							
発行年月日	西暦1996年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
こどみ 小堂見遺跡	ちのしたまがわ 茅野市玉川 3,260	20214	160	35° 59' 15"	138° 11' 15"	平成7年 5月15日～ 8月4日	1,420m ²	ふるさと農 道整備事業 玉川地区に 係る造成工 事に伴う遺 跡発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小堂見遺跡	集落跡	調文時代中期	住居址	1軒	縄文土器			
			土坑	17基	石器			

小堂見遺跡

—ふるさと農道整備事業玉川地区
埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成8年3月17日 印刷

平成8年3月22日 発行

編集 長野県茅野市塚原2丁目6番地1号
発行 茅野市教育委員会

印刷 日本ハイコム株式会社

